

奥物部の自然の現状から 流域の未来を考える

三嶺の森をまもるみんなの会
押岡茂紀

2021年12月撮影



日本経済新聞電子版より



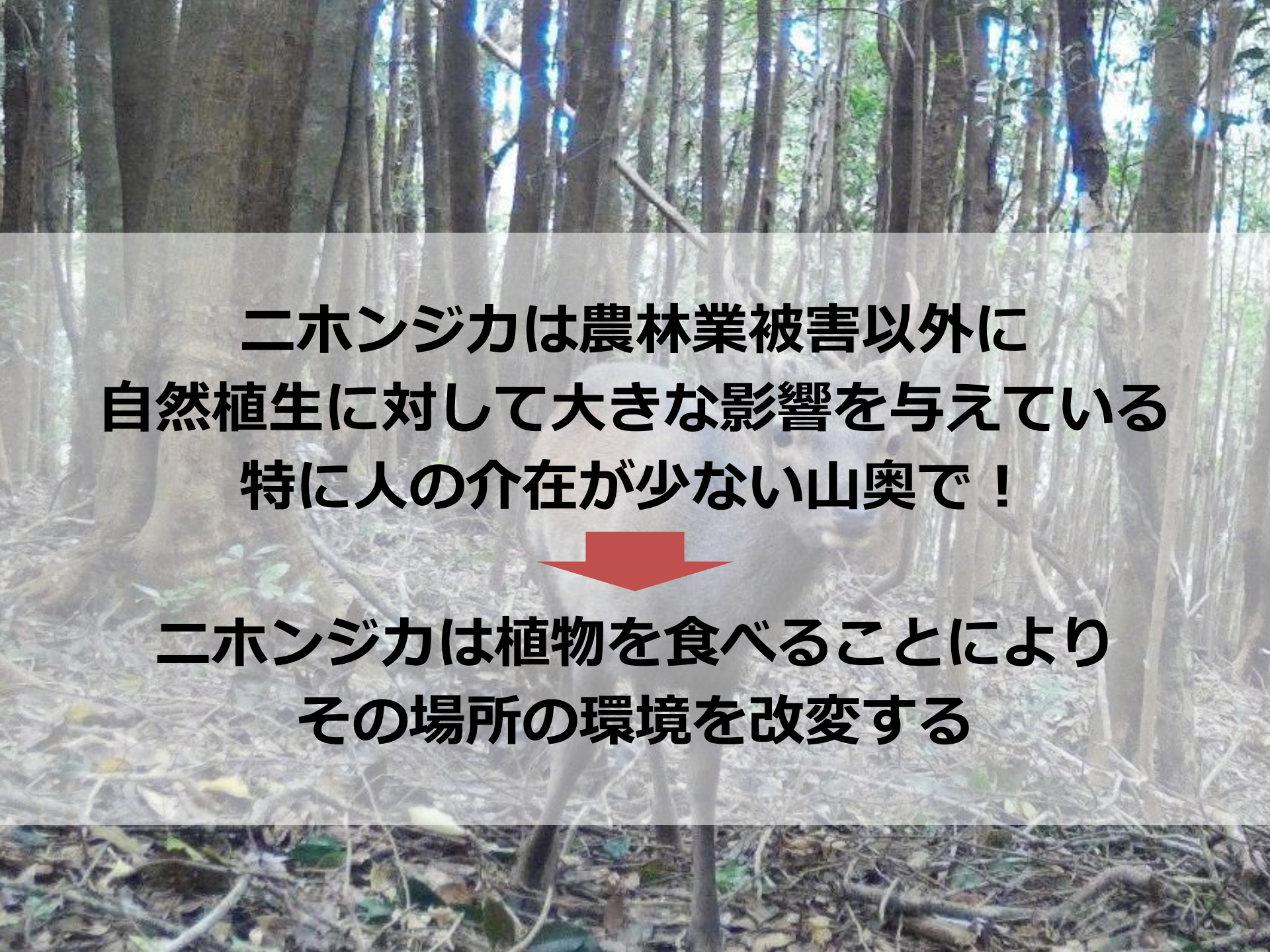
農林水産省ホームページより



神奈川新聞電子版より



北杜市野生鳥獣対策協議会の設置によるシカ・イノシシ・サルの被害防止対策 ー山梨県北杜市ーより



**ニホンジカは農林業被害以外に
自然植生に対して大きな影響を与えている
特に人の介在が少ない山奥で！**



**ニホンジカは植物を食べることにより
その場所の環境を改変する**



三嶺 剣山

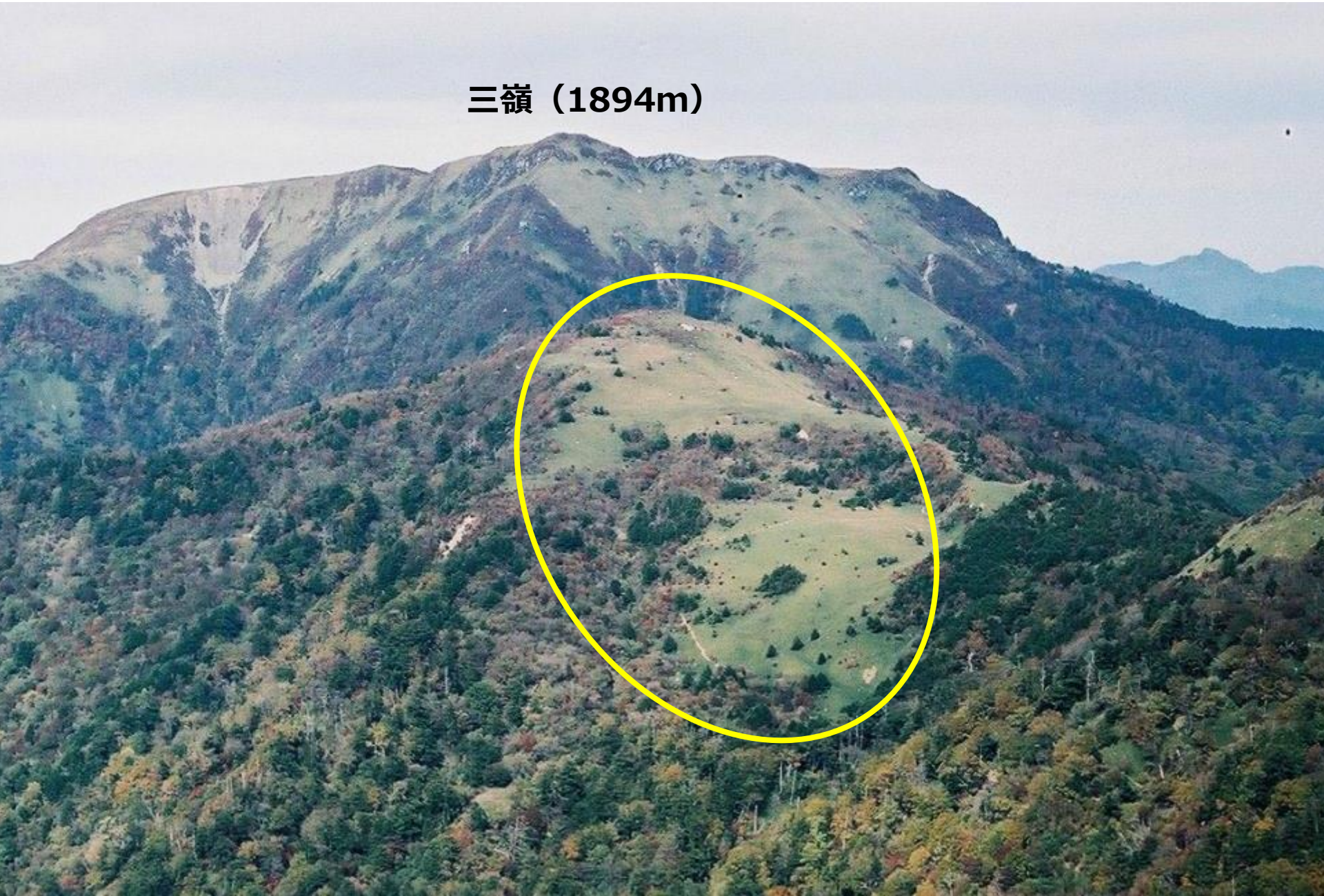
上葦生川

高知市

物部川

カヤハゲ・萑生越 2002年（食害前）

三嶺（1894m）



カヤハゲ・萋生越

2005年→2007年

2005年春先



2007年秋

ササ・樹木が枯死



ササと樹木がセツトで被害

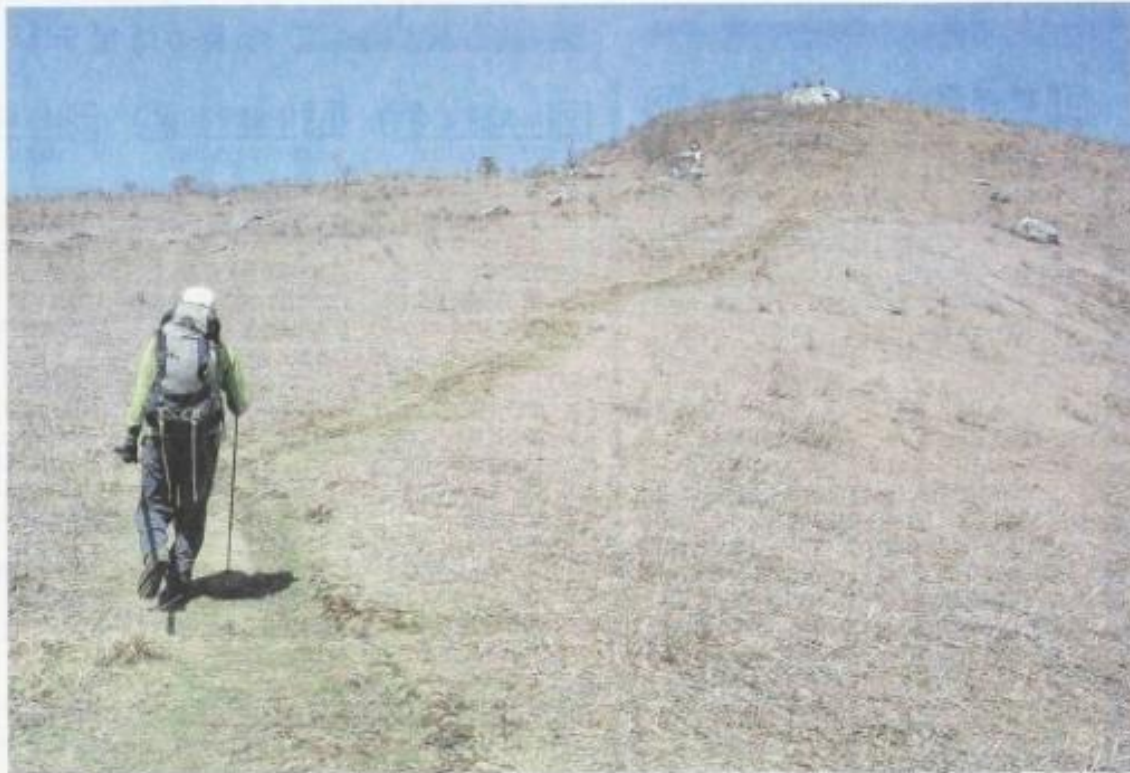
白髪山 2010年



三嶺ササ原はげ山に

目の前の光景に言葉を失った。香美市物部町の三嶺―白髪山登山道中にある葎生越(むらさき)のふもとからカヤハゲ付近。本来なら青々とした美しいササ原の景観のほすが、シカに食い荒らされ、見渡す限り白く枯れ果てたミヤマクマササの惨状が広がっている。登山道から外れて歩くと、乾ききった葎が、踏みしめるたびにボキボキとむなしい音を発した。

(反田浩昭)



シカの食害で白く枯れ果てたササ原が広がる三嶺山系のカヤハゲ(香美市物部町)

シカ食害 深刻



カヤハゲ山頂から三嶺方面を望む。かつては豊かな植生が広がっていた(平成4年10月)

シカの食害から植物を守るため、ボランティア団体「三嶺の森をまもるみんなの会」と高知中部森林管理署は、昨年からの食害防護柵の設置や樹木のネット巻きを行っている。十一日には百五人が参加し、葎生越からカヤハゲにかけての六カ所、計約六百平方メートルにネットを設置した。抜本的な対策にはシカの頭数を減らすことが効果は絶大だが、狩猟者は高齢化し、関与が減少している。三嶺山系の自然が悲鳴を上げている。

たまままで、年々深刻さを増している。同会代表の依光良三高知大名誉教授の調査によると、食害は二年ほど前から急速に広まった。シカは樹皮や根、低木の身はもちろぬ、枯れ葉、ササの根までを掘り返して、餌をまわるといっている。保水力を失ったところは、昨年からの大雨が降ると、柵の設置や樹木のネット巻きを危険性が高いと判断している。五年前から十年以内に崩落する危険性が高い。依光名誉教授は、食害が深刻化している。さらに事態は深刻化する。

さおりが原「原風景」 2003年



(門脇氏提供)

さおりが原 シカ食害後 2010年



林内傾斜地

2003年
(門脇氏提供)



2016年



林床のスズタケ



2003年
(門脇氏提供)



2007年



2013年



2016年

山全体で進行する土壌侵食・土砂流出

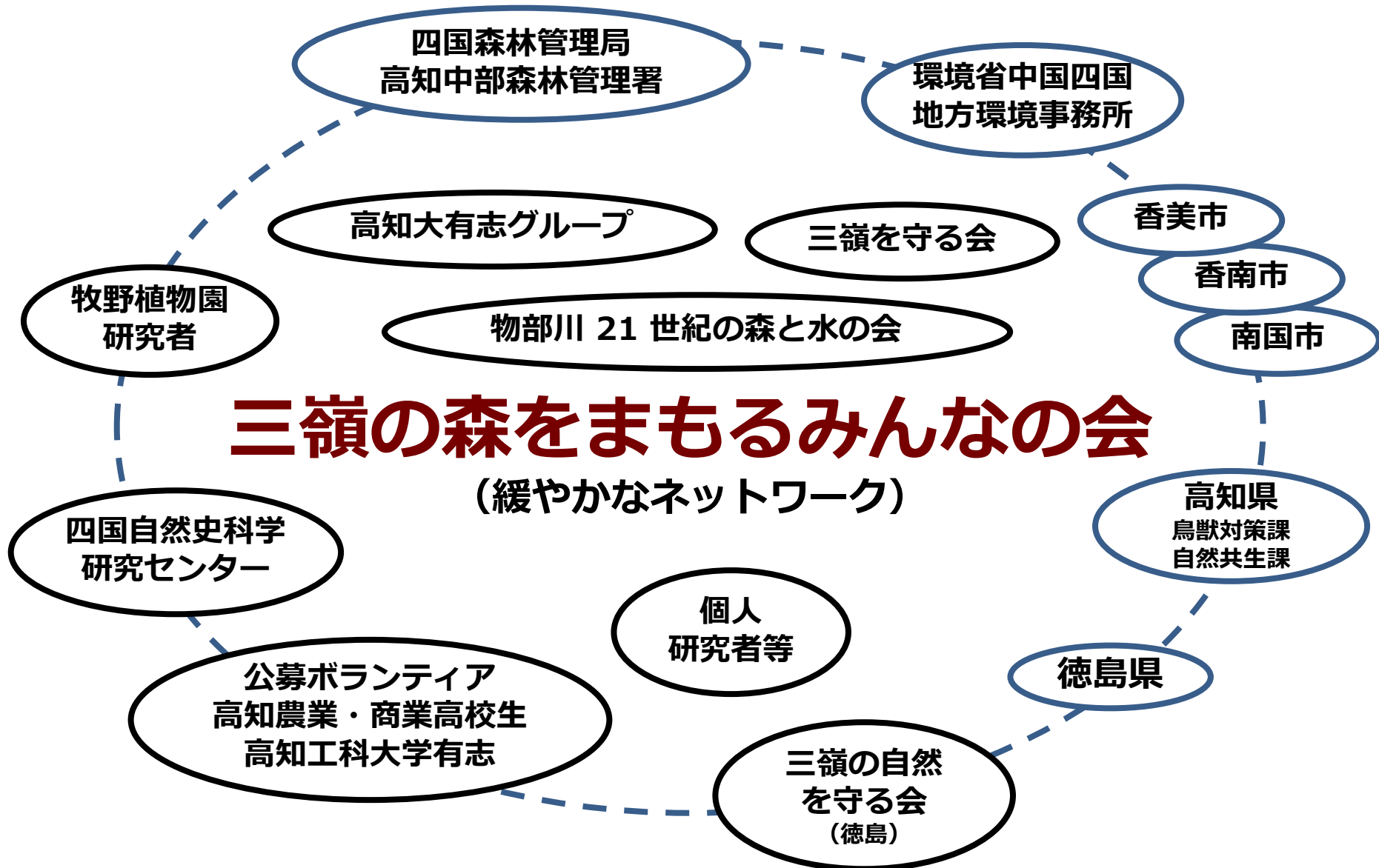


三嶺の森をまもるみんなの会

- 三嶺の自然環境がニホンジカの食害により急速に悪化する状況を危惧する関係者が集まる。
- 高知中部森林管理署をはじめ流域3市、高知県等との協働により、2007年11月よりスタート。
- 「みんなの会」は、企画とネットワークのマンパワーを提供。



組織の現状



～三嶺の森をまもるみんなの会の活動～

◆森林保全・再生活動

- ・防護柵の設置＋マットの敷設
- ・樹木保護ネット巻き

◆調査・モニタリング活動

- ・防護柵等設置の効果、植生の再生状況

◆普及啓発活動

◆管理捕獲による頭数調整

- ・適正な密度に減らすこと
→香美市や森林管理局が実施



自然再生活動 2007～2010年

- できるところから、緊急避難・応急措置的に実施（防護柵の設置等）
- 防護柵の効果の検証を開始（高知大）
- **防護柵設置の役割分担を明確化**
 - みんなの会：緩傾斜地
 - 森林管理署：急傾斜地・遠隔地
 - 高知県：希少植物の生育地

自然再生活動 2007~2010年



自然再生活動 2011～現在



自然再生活動 2011～現在

- 調査成果を踏まえた保全対策の実施
- これまで42回の活動に4,000名を超えるボランティアが参加
- 表土保全を目的とした取り組みを開始
→調査による効果の検証→新たな対策
- 林床植生の回復に向けての手法を模索
→効果的な処方箋は見つかっていない
- 香美市管理捕獲との連携
→白髪山では捕獲効率向上に一定寄与

自然再生における今後の課題

■ 樹林地内の林床植生の再生

植生が回復傾向にある既存の防護柵の周囲を新たに防護柵で囲い、保護範囲を拡大することでシードバンクとしての植生域の拡大を図る

■ 防護柵の維持管理

防護柵の効果を維持するためには維持管理が不可欠。地点数の増加や延長の増大によって維持管理が十分に行き届かなくなっている。近年、大雪や台風に伴い食害木等の風倒木が増えており、柵の破損も少なくない中、メンテナンスの重要性はますます増大している。

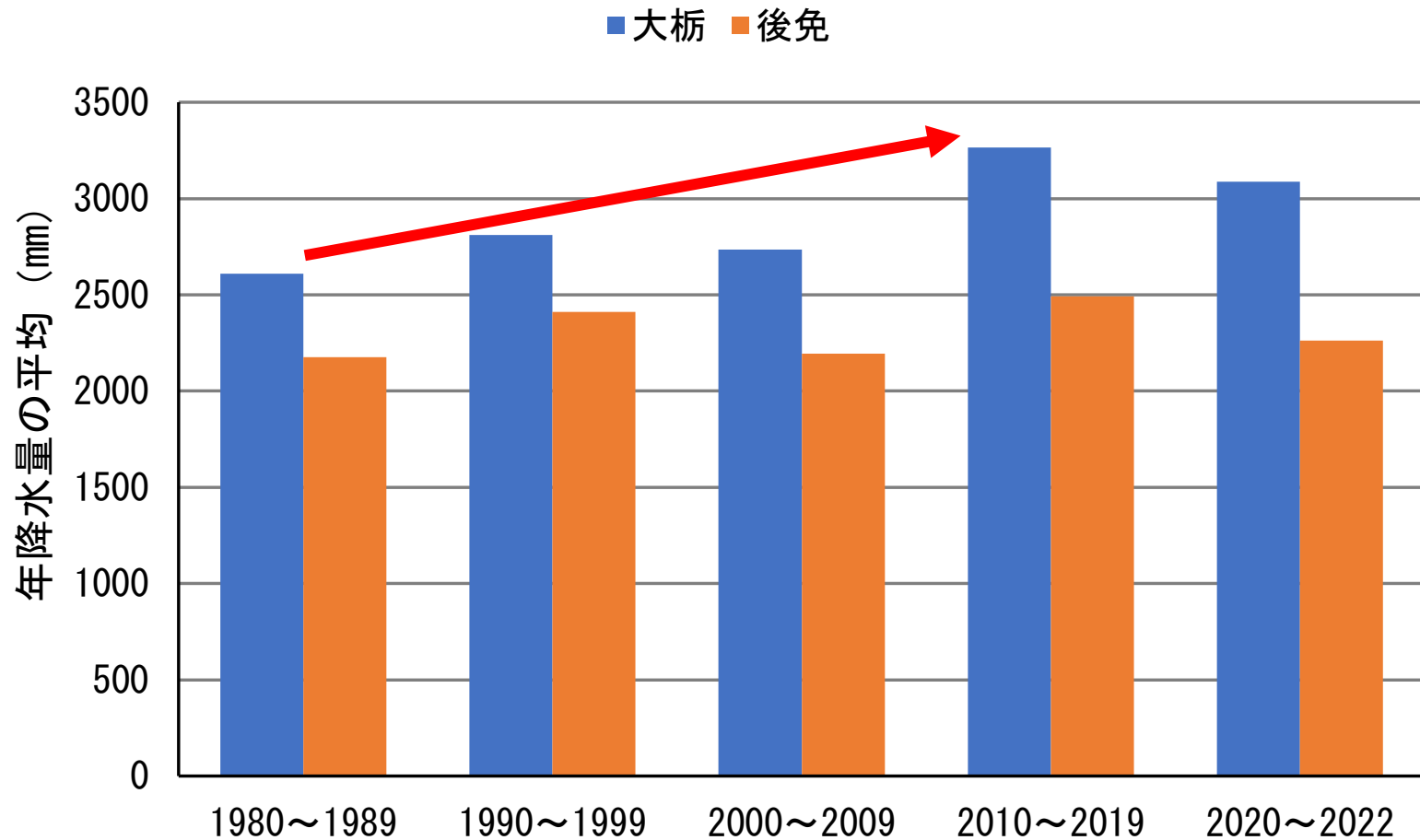
■ 管理捕獲との連携

流域の未来を考える



■ 年降水量の平均値

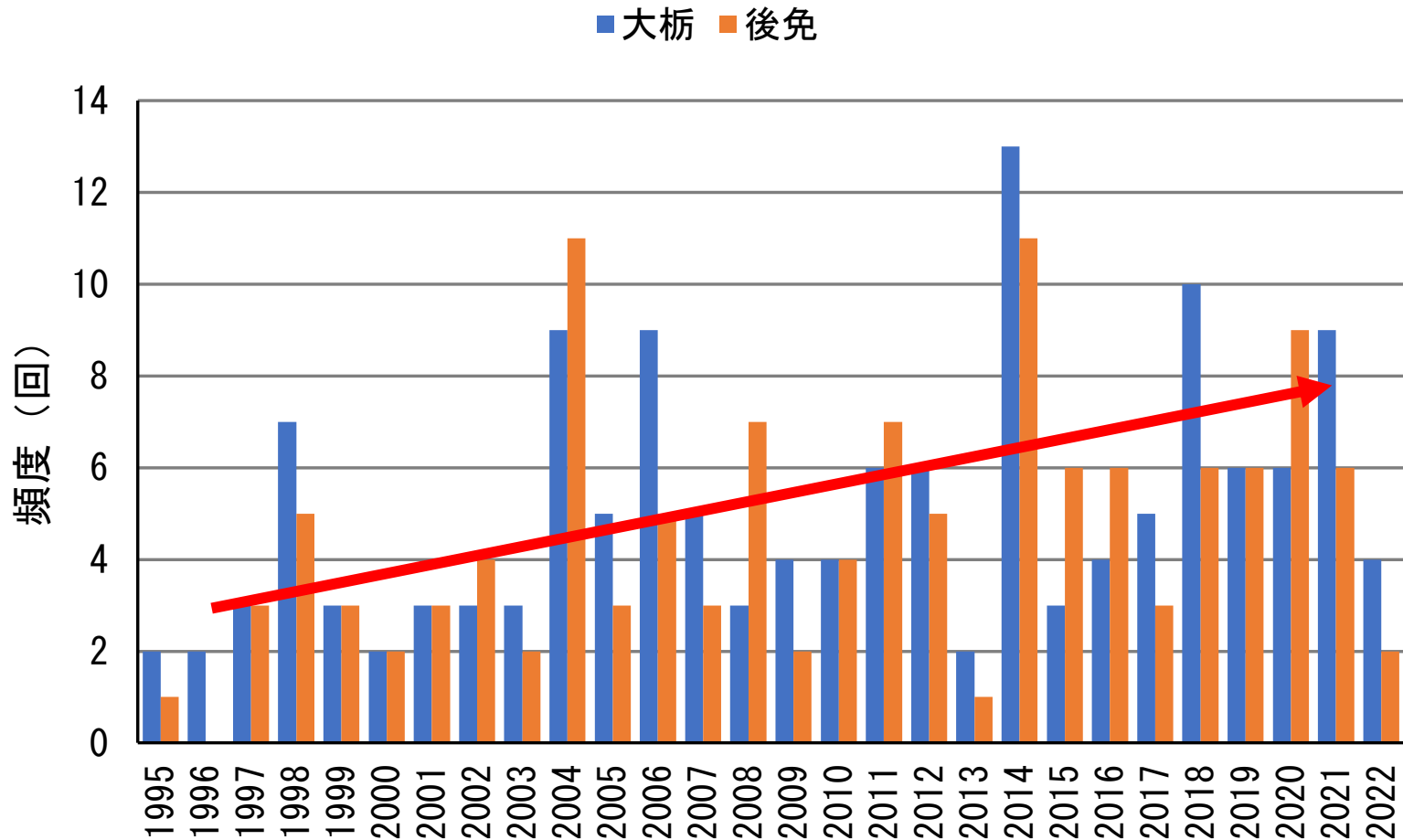
1980年代→2010年代 大栃では約650mm増加



流域の未来を考える



■ 時間雨量30mm以上の雨（激しい雨）の頻度 1990年代→2010年代 増加傾向



流域の未来を考える



- 降雨パターンの変化→短時間に、強く、多く
- 源流域の森林の変化→土砂崩壊のリスク上昇
- 人口の減少、偏在 →維持管理の限界

自然状態で災害リスクが低下する

環境を整える必要がある

(生態系の機能を活かした防災・減災)

森林生態系の再生



森林生態系 再生への課題

- ◆ 源流域**樹林内の林床植生の再生**
(防鹿柵の設置と植樹・稚樹囲い)
- ◆ 原生的森林の**次世代の育成**
(森の循環系をどう再生するか)
- ◆ 進行中の**土砂流出・崩壊の抑制**
- ◆ **猟師の後継者の確保**
- ◆ **野生動物管理のあり方**の検討
- ◆ **地域連携・協働の仕組み**の維持



流域の未来を考える



二ホンジカとの共存

人間活動（歴史）に翻弄されてきた！！

～江戸時代：農地を守るための戦い

明治・大正：鉄砲を手にした人間による

無秩序な大量捕獲（一部地域では絶滅）

昭和：絶滅の危機、激減したため保護される

平成・令和：個体数の回復、そして被害の拡大、激化

自然とどのように向き合うか？

地域を見つめる目（関心）

おわり

2021年12月撮影